

中学校地理教育を考える

菊地 達夫*

ミニシンポジウムの趣旨

学校教育では、昨年度(2002年)の小学校・中学校に続き、今年度(2003年)の高等学校において新課程が完全実施となった。新課程の基盤となる学習指導要領は、小学校3年生以上における「総合的な学習の時間」の新設、教育内容を精選した学校週5日制のもとでのゆとり教育の実践、地域や児童の実態に応じた特色ある教育の実践が大きな特徴となっている。地理教育では、新設された「総合的な学習の時間」や高等学校情報科との関係を模索する動きが強く、地理教師の貢献が期待されている。

他方、地理を専門とする教師の新規採用は、小中の義務教育機関において少なく、高等学校地理歴史科でも例外ではない。そのため、多くの学校で、地理を専門としない教師が地理授業を担当している。とりわけ、地理は、自然地理分野、人文地理分野、地誌に分かれ、指導領域が広いことから、敬遠されやすい。その傾向は、地理野外調査(地理巡検)の低調さに現れていることを指摘できる。

このような実態をふまえ、本会では、学会としての社会的貢献を図るべく、地理教育を強化することで意見が一致し、昨年度よりシンポジウムを開催する運びとなった。昨年度のシンポジウムは、「高校地理教科書を考える」と題して、大学教員や高等学校教員から発表をいただき、教科書掲載図表の問題点など、話題に富み好評を博した。今年度も好評を維持継続するため、中学校地理教育をテーマとするシンポジウムとした。

中学校地理教育を取り上げた背景には、学習内容の削減に伴う学力低下、公私立校の格差、中高一貫教育への移行といった課題に直面していることがある。このような学校教育全体を取り巻く変化は各教科に影響する。本シンポジウムでは、中学校の地理教育実践を取り上げることはもちろん、その接続機関となる小学校や高等学校さらには中高一貫教育を含む公私立校の実践を加えることで、授業の特色や問題点を明らかにすることができると考えた。また本会では、これまで義務教育機関における地理教育の実践報告は少なかったので新鮮味も増した。

具体的には、田丸先生(札幌市立柏中学校教諭)には身近な地域の学習についての報告、村岡先生(札幌市立豊園小学校教諭)には小学校地理的内容の実践報告、伊藤先生(立命館慶祥中学校・高等学校教諭：当時)にはGISの教材化の試みについての報告、山下先生(札幌市立啓明中学校教諭)には地理教育の指導と評価についての報告をいただき、コメントとして高平先生と山内先生(藤女子中学校・高等学校教諭)の両名から、最後に総括として飯田先生(札幌市立稲陵中学校教諭)にシンポジウムのまとめをいただいた。これら多様な報告者の選出は、北海道地図教育研究会の助力があったおかげである。

シンポジウムを通じて、今後の地理教育が活性化し、地理学の社会的貢献が増せば幸いである。

*北海道浅井学園大学短期大学部